



「品質は命なり」

ベンダ工業代表取締役会長 八代恭宏

2008年現在、我がベンダグループは日本のほかに、韓国、中国、タイ、インドと四カ国に生産拠点を構え、2007年のリングギア生産実績は1200万台、世界2位のシェア（自社推計）まで迫り着くことができました。ただここに甘んじることなく、2010年には年産1500万台に到達しシェア1位、世界の頂点を必ずや達成すべく邁進しています。

川尻小仁方の中小企業、『財閥企業』ならぬ、言うならば「人・物・金」の『無い閥企業』だった我が社。躍進できたのは一にも二にも「海外展開をやったおかげ」と断言いたします。現在進出している四カ国。私の思いとしては最も苦労したのが韓国です。今回は韓国進出における苦労話をさせていただこうと思います。

進出当初の1980年代は韓国に進出した企業の10社中9社が失敗していた時代でした。（某大手自動車メーカーですら！）韓国進出の数年前からベンダは韓国へのリングギア素材の輸出を行っていました。そこへ現地企業から技術提携の話が舞い込んできました。我が社は条件として固有技術の使用料としてロイヤリティ契約を締結していましたが、約1年後、突然信頼していた提携先に契約の解消を届け出されてしまいました。

私の父で先代会長・八代一芳は激怒し、提携関係解消に踏み切りました。その時、提携先の紹介者であった韓国大手企業の幹部の方が心を痛め、新たなパートナーを探してくださり、韓国仁川市の有力企業であったそのパートナー企業主体の合併会社「ベンダ鮮光工業」設立に至ったのが1986年のことでした。

その後実際に生産が開始され、しばらくしてパートナー企業が採算性を理由に経営主体をベンダに押し付けてきました。毎月毎月赤字経営が続き、私をはじめ弟の専務、常務（当時）は、先代会長に「損失の少ないうちに引き上げましょう」と進言しました。先代会長の答えは「帰りたければ帰れ、わしはひとりでも残る」でした。先の見えない中でしたが、先代会長の不撓不屈の精神のおかげで我々、団子三兄弟も腹を括れた気がします。

やはり「捨てる神あれば拾う神あり」とはよく言ったもので、空前の円高となりました。その勢いに乗り、その後労働争議などの大きな問題も発生しましたが、円高による海外調達の違いも強く、韓国事業は起動に乗っていきました。紆余曲折はありましたが、韓国進出成功の根底にあったものは「品質」と「人の縁」であった気がします。我々製造に携わるものが最も魂を込めなくてはならないもの、それが「品質」です。

その後のタイ、中国、インドへの進出の際も結局決め手となったのは「品質」でした。他社に絶対に負けないと自信の持てる商品、打ちのめされても貫き通せることのできる「信念と情熱」。ここに妥協がなかった事で「良い縁」「良い運」を引き寄せることができたと確信しております。